

競艇広報誌【プロペル】 2009

Vol.

3

PROPEL

もっと競艇を

特集

競艇のために
私たちができること

主要6団体会長からのメッセージ

02 特集
競艇のために
私たちができること
主要6団体会長からの
メッセージ

- ・ 一般社団法人
全国モーターボート競走施行者協議会
- ・ 財団法人 日本モーターボート競走会
- ・ 社団法人 日本モーターボート選手会
- ・ 全国競艇施設所有者協議会
- ・ 全国ボートピア施設所有者協議会
- ・ 競艇振興会

10 HOPE!
無限の可能性を秘めた
スター候補

14 競艇を支える
プロフェッショナル

特集

競艇のために 私たちができること

主要6団体会長からのメッセージ

「競艇」に関わる私たちは今、
組織の改革に踏み込み、人心を一新して
大きく変わろうとしています。
より多くのお客さまの期待を糧に、
公営競技として責任のある貢献を果たしていきます。

今回の特集では、
競艇を支える6団体の代表者が語る
その思い、決意を紹介します。

一般社団法人 全国モーターボート競走施行者協議会
会長 青梅市長



竹内俊夫

財団法人 日本モーターボート競走会 会長



皆川浩二

社団法人 日本モーターボート選手会 会長



福永達夫

全国競艇施設所有者協議会 会長



須恵弘一

全国ボートピア施設所有者協議会 会長



松浦信三

競艇振興会 会長



小高幹雄

【プロペル】
PROpel

競艇広報誌「PROpel」は、
みんなに楽しんでいただける競艇の実現に向けた
関係者の姿と、社会の様々な分野での
貢献の様子を紹介していきます。

一般社団法人 全国モーターボート競走施行者協議会

本場活性化を軸に、 チャレンジ精神を持って取り組みます



一般社団法人 全国モーターボート競走施行者協議会 会長 青梅市長 竹内俊夫

本会は、モーターボート競走を施行する地方公共団体で構成する団体であり、モーターボート競走の公正かつ円滑な実施を確保することにより、体育事業その他の公益の増進を目的とする事業の振興に資するとともに、地方財政の改善を図ることを目的としております。昭和27年に発足以来半世紀余にわたり、モーターボート競走の健全な発展に努めるとともに、施行者の共通利益を図るため様々な事業を行ってまいりましたが、この度、公益法人改革関連法の施行等を契機に、組織の基盤強化及び責任体制の更なる確立を図るため、一般社団法人に改組したところであります。

モーターボート競走事業は健全なレジャーとして定着しているばかりでなく、その収益は教育、福祉、社会基盤整備等各種の公益事業に活用されるものであり、社会的に極めて重要な事業であります。しかしながら、現在のモーターボート競走事業は売上が再び減少に転じ、とりわけ本場の落ち込み幅が非常に大きく、そのとりまく環境は極めて厳しい状況にあります。

このため、各施行者は、経費の削減に努めるとともに売上向上に向け懸命な努力をしております。アメニティ充実のための施設改善、ナイターレースの導入、各種イベントの実施、ポイントカードの導入、場外発売、電話投票・インターネット投票等の広域発売の強化など、本場活性化を重点課題としつつ、各施行者がそれぞれの地域特性を活かしながら知恵と工夫を凝らした様々な事業を展開しています。当会としても、こうした各場の先進的な取組みに対し、支援を行うなどその推進に努めています。

今後ともこれら各種施策を強力に推進するとともに、新たな施策にもチャレンジ精神をもって取組み、競艇業界発展のため鋭意努力してまいりますので、皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

「動けば変わる」をスローガンに、 改革に取り組みます

財団法人 日本モーターボート競走会 会長 皆川浩二

現在、公営競技全体が厳しい状況にある中、私ども競艇業界の売上は、2007年度は4年ぶりに1兆円の大台を回復しましたが、昨年度は3%マイナスの9,772億円でした。世界不況の影響を受け、日本経済の低迷が大きな要因となっており、今後も先行き不透明で予断を許さない状況にあります。



しかしながら、このような時代だからこそ、役職員一同「動けば変わる」をスローガンに、何でもやってやろうというチャレンジ精神で様々な改革に取り組んでいるところでございます。本年5月には待機行動の在り方をお客さまの視点に立ち、「お客さまにわかり易い」ルールへと見直しを行いました。また、スター選手の育成については、より優秀な人材を確保するため募集要項の見直し、競艇学校での訓練内容の充実、競艇場の競走水面を開放した支部訓練の充実、各種講習会への参加、マスコミへの露出機会の創出等、スター候補選手育成プログラムの構築を図っており、より魅力ある選手を生み出し、育ててまいります。

財団法人 日本モーターボート競走会は18競走会と連合会が一元化し、新しい競走会として発足して1年と7ヶ月が経過いたしました。国土交通大臣より指定された競走実施機関として、「競走の公正かつ安全」な運営はもとより、より面白い競走としての魅力を築き上げ、今後とも競艇業界発展のため関係団体との連携を密にし、各種施策の推進に取り組んでまいり所存ですので、関係の皆様には一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。

社団法人 日本モーターボート選手会

時代の要請に応え、 選手ならではの貢献を



社団法人 日本モーターボート選手会 会長 福永達夫

競艇業界の長い歴史の中で、選手の、選手会の果たすべき役割は、改めて言葉にするまでもなく、大変大きく重要なものです。

何時の世も、何時の時代も、選手自らが研鑽努力して技量を磨き、常にファンに魅力あるレースを提供するという使命に変わりはありません。

ただ昨今は、新たな時代の流れにより、この使命感に加え、よりファンを大切にしファンの期待に応じていくため、競走以外にも、ファンとの交流が求められているところです。

我々選手は、これらの要請に応えることは勿論のこと、業界が推進する各種施策には、会を挙げて協力するという基本姿勢であり、会員には機会を捉え周知しているところです。

選手にしか出来ないペアポート、トークショー等を通じて、来場促進やファンサービスの一助となれば幸甚です。

また、引き継がれるべきよき選手会の伝統として、選手道や先輩と後輩の関係を維持するとともに、選手会自らが新人の育成を心掛けていくことが大切であると認識しております。

一方、業界内で選手会の果たすべき役割とは別の視点から、プロスポーツ選手の団体として、広く社会に向け貢献することも時代の要請であろうと考えています。

今後ともハンセン病制圧事業を始めとする社会協力活動には積極的に参画していく所存です。

業界全体の飛躍を目指し、 関係団体との連携を強化します

全国競艇施設所有者協議会 会長 須惠弘一

当協議会は、競艇場施設を所有する6社と、レースに使用するボート・モーターを所有する7社の計13社の民間企業によって構成されており、競艇業界の発展に寄与するため、常にお客さまの視点に立った快適な施設づくりを目指すとともに、公正かつ安全なレースが円滑に実施できるよう1級整備士・2級整備士によるボート・モーターの日常点検や整備などに努めて参りました。そして今後も、“民間企業の力”を最大限に活かした先駆的な役割を果たし、競艇事業の活性化に貢献して参りたいと考えております。



まず、施設の分野においては、「より快適な観戦環境の整備」と「地球環境に配慮した取り組み」という2つの点を重視し、場内の分煙化やバラエティー豊かなグループ席の設置などを積極的に推進する一方、屋上緑化や太陽光発電・冷房用ミストの導入なども実施し、環境対策・エコロジー活動の促進に取り組んで参ります。

また、ボート・モーターの整備に関する分野においては、当協議会の整備士を「スター選手育成事業」へ積極的に参加させ、これまで培ってきた知識や技能に基づいたモーター整備の実技指導にあたるなど、新しい形での協力体制も展開して参ります。

昨年4月より「競艇振興会」を中心として新しいスタートを切った競艇業界が再度飛躍するため、当協議会も関係団体との連携強化を図るとともに、2012年の業界売上目標である1兆2千億円を目指して、今後も微力ながら尽力して参りますので、関係各位のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

全国ボートピア施設所有者協議会

目標に向かって、関係者全員が 必死の努力をいたしましょう



全国ボートピア施設所有者協議会 会長 松浦信三

全国ボートピア施設所有者協議会は、1995年に発足いたしました。当初、場外発売場は7場でしたが、現在では39場となっております。

今、業界全体では、2012年に1兆2千億円の売上努力目標が掲げられており、私共協議会も目標達成へ必死の努力をおこなっております。

この目標達成のためには、関係者全員の力を一つの方向に向けて盛り上げていく行動が必要であると思われま

す。一例として、年末の賞金王決定戦競走で、全国24の本場と39の場外発売場の併せて63施設において、全ての職員、従業員が同じユニフォーム等を着用して、場内整理から広報宣伝、ファンサービスに携わるとともに、出走日程に支障のない選手も総動員してPRすれば、イベントととして大いに盛り上がるものと思われま

す。賞金王決定戦競走でも売上努力目標が設定されておりますが、売上ノルマとしての目標設定を行い、目標達成の施設については顕彰対象とする等、特典をつけることで更に意欲的な活動ができるのではないかと考えま

す。当協議会は競艇事業と運命共同体であり、これからも業界発展のために、ボートピアの新規開設はもとより、複数場のレース開催及び開催日数の拡充を踏まえ、寄与していきたいと考えております。

積極性とスピード感を持って、 競艇の振興に力を尽します

競艇振興会 会長 小高幹雄



2008年4月より新組織「競艇振興会」としてスタートし、競艇の売上増進と活性化を目的に掲げ、全国的な広報・宣伝、売上向上のための戦略的な施策を推進し、電話投票業務並びに情報システムの管理・運営を中心に振興事業を進めてまいりました。

業界では2012年の売上目標を1兆2千億円に設定しております。この目標は大変難しい数値ではありますが、競艇業界の各団体が一致団結し、協力して是が非でも達成しなければなりません。

そのためにも関係団体が足並みを揃えて大胆かつ緻密な施策に取り組み、全体のパイを広げ売上を増加させなければなりません。

競艇業界は今、大きく変わろうとしています。百の議論よりもまず実行することで業界を変えていきたいと考えています。

これからも競艇振興会は競艇業界が再度飛躍するために中心的な役割を担い、民間的な手法をも積極的に取り込み、スピード感を持って事にあたっていきたいと思っております。

些細なことでも競艇振興会にご相談いただきたいと思います。当会ではできる限り、迅速かつ適切に対応させていただきます。

みなさんのご協力を是非ともお願いいたします。一緒に、競艇業界の明日を切り開いて行きましょう。

第2回
HOPE!
無限の可能性を秘めた
スター候補★

元スター選手の植木通彦氏をコメンテーターに迎え、
スター候補選手としての可能性と
人間的魅力を紹介します。

プレッシャーが 勝負の原動力になる

2008年の最優秀新人選手に選ばれた篠崎元志選手。周囲の期待を背負いながら、めざましい活躍を続けています。実はこの対談の数日前に、表彰式で篠崎選手に優勝トロフィーを手渡したという植木通彦氏との対談から、レースに臨む時の心構えやファンの皆さまへの思いなどを話していただきました。

子供のころから
1番でないと気が済まなかった

植木 篠崎選手は、自身をどのような性格だと思っていますか。
篠崎 昔から目立ちたがり屋だったと思います。学級委員をやっていたこともありまして、人前に出ることが好きでした。また、何でも1番じゃないと気が済まない性格で、足が速かったこともあります。徒競走で負けるのは大嫌いでした。
植木 幼稚園の時に運動会のリレーでアンカーだったのですが、自分がバトンを渡された時には他のチームから大きく離されて最下位だったのです。この時は自分一人だけが遅れて走るのが本当に嫌で、泣きながら走ったのを覚えています。
植木 生まれ持った勝ち気な性分なのでしょうね。競艇選手である現在の姿にも通じる部分がありそうですが、篠崎選手が競艇選手になろうと思ったのは、どういう経緯があったのでしょうか。
篠崎 父の友人に競艇ファンの方がいて、その方に「やってみらんか(みないか)」と勧められたのがきっかけです。この時は、競艇のことを何も知らなかったのですが、競艇場に行って迫力のあるレースを間近に見た瞬間、「これし



スター候補選手 登録第4350号(福岡)

植木通彦氏 × 篠崎元志選手

Michihiko Ueki × *Motoshi Shinozaki*

かない、競艇選手になる」と決心しました。
植木 競艇学校に入ってからはどうでしたか。すごくきつかったという人もいますし、もっと厳しいと思っていたと感じる人もいます。
篠崎 最初の3カ月間で行われる初期訓練は厳しかったですね。自分でも相当の覚悟を決めて入学したつもりでしたが、それでも本気で「帰ろう」と思ったことが3回ほどありました。
植木 最近は、そこで実際に帰ってしまう人もいますが、篠崎選手がそれでも競艇学校にとどまった理由は何だったのでしょうか。
篠崎 ここで帰ってしまったら、何も残らないと思ったからです。競艇学校には、家族や周囲の人々の応援があっただけで入学できました。もしも帰ってしまったら会わせる顔がないと思いました。学校での訓練は厳しい面もありましたが、一方でプロ選手としての自己管理能力を身につけることができました。卒業した今では、いろいろな誘惑の多い実

社会のほうが、学校よりも厳しい環境なのかもしれないと感じています。

プロ意識を高めた 白水選手との出会い

植木 篠崎選手のプロデビュー戦は、残念なことに妨害失格という結果でしたね。
篠崎 よく憶えています。周りから期待されていたのはわかっていたし、頑張らないといけないという責任感が強すぎて、気持ちが空回りしてしまったのかもしれない。
植木 学校を卒業する時にマスコミにも騒がれていましたし、篠崎選手は最初から期待が大きかったようですよ。3カ月後の初1着までは長かったのではないですか。
篠崎 なかなかうまくいかないことが続いて、いつとれるのだらうと思っていたので1着をとって気持ちが楽にはなりました。ただ、それで何かが変わったというわけではなく、

篠崎選手の 生い立ち、プロになるまで

小学生時代から野球に打ち込みプロ野球選手を夢見ていたが、体が小さかったことから野球の道を断念。進路に悩んでいた中学2年の時に、父の友人の助言から競艇選手という道があることを知る。その後、実際に競艇場でレースを見て選手になることを決意。イベント会場で当時の植木通彦選手に直接言葉をかけられたことも励みになった。
競艇学校への受験では最初は視力の問題で不合格となり、泣きながら家路についたという。専門機関でのトレーニングで視力を回復させて臨み、3度目で念願の合格を果たした。
高い潜在能力は競艇学校時代から注目され、卒業後の2005年3月に選手登録。5月に念願のプロデビューを果たす。





篠崎元志選手

Motoshi Shinozaki

1986年2月28日生まれ。福岡県福岡市出身。福岡支部所属。身長168cm、体重50kg、血液型A型。登録期：96期。登録第4350号、A1級。



篠崎選手の プロ選手としての活躍

プロデビューから3ヶ月後に初1着をとると、2006年6月には初優出し、翌年4月には初優勝を飾る。奇しくも、デビュー戦・初1着・初優勝はすべて若松競艇場のレースと、若松に縁がある。

デビューから3年でA1級に昇格、2008年の最優秀新人選手を受賞。2009年11月15日現在の通算成績は勝率6.13、優出27回、優勝6回。10月20日から25日にかけて若松競艇場で開催された新鋭リーグ第17戦～植木通彦フェニックスカップ～で優勝し、植木氏より優勝トロフィーを授与された。

最初のころは成績があまり上がりませんでした。今振り返ると、成績が伸びなかったころは仕事に対する姿勢も含めて、プロとしての自覚が足りなかったのだと思います。

植木 その後、大きく成績を伸ばしたきっかけは何だったのでしょうか。

篠崎 お世話になっていた「我勝手隊(わがかってたい)」というベテラングループの先輩である白水勝也(しろうずかつや)選手に食事に誘われ、「これから俺が面倒を見るから、お前をSGに行かせられなかったら俺の責任や」と言ってもらえてからです。

植木 白水選手といえば、当時もSGで活躍されていた名選手ですから、そんな先輩に直接声をかけられたのは驚いたでしょう。

篠崎 先輩とはいえ白水さんと接したことがほとんどなかったのびっくりしましたね。それからは、休みの日にも先輩のもとに通ってアドバイスをもらうようになり、意識が変わったと思います。白水さんとの出会いが間違いなく転機になりました。

プレッシャーがかかるほど いい状態で集中できる

植木 競艇選手として5年がたって、今ではSGの舞台も経験するようになりました。レースには、どのような心構えで臨んでいますか。

篠崎 これまでの経験からいえるのは、レース前に緊張している時や、不安な気持ちがある時は自分にとってすごくいい状態なのです。そういう時のほうが力を発揮できるというか、集中できているように感じます。

植木 篠崎選手は、先日の新鋭リーグで見事に優勝しましたね。その時も、ずいぶん緊張している様子に見えましたよ。

篠崎 あの日は天候が急に変わってきたりして、最後まですごく緊張していました。ただ本気で優勝したいレースでしたし、気持ちも入っていましたから、結果を出すことができホッとしましたね。

植木 若い選手が緊張しているのを見ると、後ろから背中をたたいてあげたくりますが、よく考えると私たちの若い頃も緊張していたのだと思います。新鋭リーグを走ると、たとえばSGのようなレースを走るとでは、緊張感は違ってきますか。

篠崎 新鋭リーグでは優勝して当たり前という期待がかかります。自分をライバルとする選手が大勢いる中で、得

点トップで優勝戦に出て、1号艇で勝たなくてはいけないという思いがあります。その一方で、SGではまだ自分はチャレンジャーの立場ですので、周りの期待の大きさに差があるのです。だから立ち位置によって緊張の度合いが違いますし、今の自分はその立ち位置を一つずつ上げていく段階だと思います。結果を残しながら、ステージを上げていきたいと思っています。

気迫がファンに伝わるような走りを

植木 篠崎選手は2008年の最優秀新人選手に輝きました。全国スター候補選手にも選出された今後は、ファンの注目もますます高まっていくと思います。

篠崎 注目を集めることは嫌いではありませんが、やはりプレッシャーは感じます。レースだけでなく、普段の立ち振る舞いにも気を遣わないといけないという自覚があります。

植木 選手としては、どのような部分でファンにアピールしていきたいと思っていますか。

篠崎 自分では特別に何か個性を持っているというわけではないと思っています。あえていうなら、気持ちで走るレース、気迫がファンに伝わるレースを皆さんに見ていただければと思います。

植木 確かに個性は自分で作るものじゃないですね。私の場合は、「植木は追い上げるレースをする」といわれましたが、最初から意識したことはありません。そういうレースをしているうちに期待を自覚しながら、結果的に個性になった。だから篠崎選手も自然体でいいと思います。

ところで、ファンの間では、ターンがきれいな選手という印象があるそうですね。

篠崎 特にターンについて考えたことはないのですが、お客さまから格好良く見られるように意識はしていますね。足の位置や蹴る場所など、どうやったらボートが安定するかを研究しつつ、お客さまから見られることも考えてモンキーターンをしています。

植木 私の世代では格好良く見せるという意識はありませんでしたし、やはり若い選手はそのあたりの感覚が違いますね。選手になって5年、これからもさまざまな機会をチャンスとしてとらえて、ステップアップしていったいと思っています。



植木通彦氏

Michihiko Ueki

1968年4月26日生まれ。福岡県北九州市出身。O型。登録第3285号。「艇王」「不死鳥」として知られる。通算成績は4,500走1,562勝。勝率7.58。優勝74回。2007年7月に現役を引退し、現在、財団法人日本モーターボート競走会理事。

篠崎選手との対談を終えて……植木通彦

冷静な受け答えの中にも、内に秘められた熱い気持ちを感ぜさせる篠崎選手。白水選手との出会いが篠崎選手にとってのチャンスになったように、スター候補選手になったこともチャンスととらえて、さらなる飛躍のきっかけにしてほしいですね。競艇業界もファンも楽しみにしていますので、怪我をしないように、若手を引っ張ってくれるよう期待しています。



第2回 競艇を支えるプロフェッショナル

このコーナーでは競艇を様々な分野で支えているプロフェッショナルにご登場いただき、その仕事の内容や役割についてご紹介します。

水上訓練の合間に、真剣な表情で大野教官の指導に聞き入る訓練生



わずか1年という短期間でプロの競艇選手へと育て上げる

やまと競艇学校の選手養成訓練

全国で唯一、競艇選手を養成する「やまと競艇学校」。ここでは明日のスター選手を夢見て、訓練生たちが日々厳しい訓練に取り組んでいます。今回は、訓練の指導に当たっている教官に実際の教育方針や理念についてのお話を伺うとともに、競艇学校の1日取材しました。



実戦さながらの模擬レースを指導する大野教官

1年でプロ選手へと育てるために自己管理を徹底的に指導

「全くの素人である訓練生を、プロの競艇選手へと育てるための期間はわずか1年です。私たち教官にとっては非常に短く感じます」と、お話しいただいたのは、(財)日本モーターボート競走会競艇学校養成課の大野信一係長。現在、やまと競艇学校の主任教官のひとりとして、2009年4月に入学した第106期生25名の養成を担当しています。教官は操縦や整備をはじめとするさまざまな実技やモーターボート競走法をはじめとする学科、プロ選手としての心得を限られた期間のうちに習得させる必要があるため、少しの時間も無駄にできません。訓練生の活動は、起床から授業、食事、消灯まで毎日が分刻みに決められており、常に5分前の行動がとれるよう教え込まれています。訓練を安全・円滑に進めるために不可欠な自己管理能力がしっかり身につくように、規律を守る習慣は徹底して教育されます。

たくさんのお客さまが観戦し、多くのスタッフが関わって行われる競艇の世界では、分刻みの時間管理に基づいて競走が施行されています。選手もスケジュールを厳格に守り、万全の気力・体調で競走に臨まなければならないことは言うまでもありません。競艇選手にとって、何よりもまず習得しなければならないことが自己管理能力なのです。

「水の上」でも、「陸の上」でも、プロとしてふさわしい人物になるために

自己管理のほかにも、やまと競艇学校では「礼と節」をモットーに、一般社会人としての人格形成を行っています。プロの競艇選手には、操縦・整備の技術と並んで、人間としての基本的な立ち振る舞いが求められるためです。

大野教官は「訓練生には『水の上』(競走)での速さはもちろんですが、『陸の上』(人としての振る舞い)でも立派な人格と技量を兼ね備えた『強い選手』を育成しています。

訓練の進み具合などについて教官同士のミーティングで共有



プロになってから礼と節の不備を指摘されることがないように、準備や挨拶など人として当たり前のことを技術とあわせてしっかりと教えています。そして、『陸の上』で真面目にやっている訓練生は『水の上』の成績も伸びてくるものなのです」と、その思いを熱く語ってくれました。

礼儀や節度など、プロの選手という大勢のお客さまに注目される立場ともなれば、当然ながらそれを疎かにすることはできません。お客さまや競艇場の関係者をはじめ、多くの人々に支えられていることに感謝の心を持つ、謙虚な人間であることが求められるのです。

怪我をせずに、1日の終わりを無事に迎えることが何よりも大切

毎日の訓練を行う上で、教官が最も厳しく指導しているのが安全についてです。常に危険と隣り合わせの模擬レースは、わずかな判断ミスが事故につながる恐れがあります。事故は、自らの怪我につながるだけでなく他の訓練生を巻き添えにしてしまう可能性もあるため、絶対に起こしてはいけません。しかし、頭では理解できている、いざ水面に出るとどうしても負けたくないという意識が強くなるものです。教官は訓練生たちの様子を見ながら、これ以上は危険だと判断すれば、水上訓練を途中で中断することもあるそうです。

「訓練生の後ろには常に家族の存在があります。ですから、入学したときと同じように健康な状態で卒業させることが、私たちの使命だと思っています。もちろん技術的に上達することも大切です。しかし事故を起こさず怪我をしないということが、競艇選手になるための大前提なのです。」

わずか1年という短期間でプロの競艇選手へと育て上げるために徹底的に指導するかたわら、子を思う親の気持ちを忘れることはありません。

教官にとって常に緊張が解けない仕事の中でも、6艇でスタートして6艇でゴールする競艇のごとく、日朝点呼と同じ人数が日夕点呼で揃った時が、数少ないホッとする瞬間なのです。



やまと競艇学校の1日

早朝から夜間まで、厳密なスケジュールに合わせて進行する競艇学校の1日。訓練生たちは仲間と協力しながら、夢の競艇選手を目指して毎日の厳しい課業をこなしていきます。



起床するとすぐに、まだ薄暗い中庭に集合し「日朝点呼」

6:00 起床

6:10 日朝点呼

7:00 朝食

7:50 国旗掲揚

8:00 課業開始

12:00 昼食

13:00 課業開始

16:55 国旗降下

17:00 夕食

17:45 自習

19:00 入浴・自由時間

21:30 日夕点呼

22:00 消灯



定刻になると「君が代」が放送され、学校前の広場では国旗を掲揚



水面に出て操縦訓練。緊張感が張りつめる中、モーター音が響く



楽しい食事の時間も、節度のある態度



整備の訓練。教官の指導に真剣に耳を傾けます



翌日に行われる課業の確認などのミーティング



やまと競艇学校 全国の競艇場で活躍する競艇選手、審判員、検査員の養成訓練を行う訓練機関。 ●住所：福岡県柳川市大和町大坪54-1



日本財団
The Nippon Foundation

●日本財団に関する情報はこちらから

⇒ <http://www.nippon-foundation.or.jp/>

●日本財団会長 笹川陽平ブログ

民の立場から公への貢献をモットーに内外の現場で公益活動を実践。年の三分之一を海外活動に充て、海外情勢や時事問題など多角的視点から情報を発信しています。

⇒ <http://blog.canpan.info/sasakawa/>



宮島競艇場

宮島競艇場は昭和29年11月1日、後に世界遺産となる宮島を臨む絶好のロケーションに開設されました。競艇場の競走水面の奥にはフェリーの行きかう瀬戸内海に浮かぶ宮島が構え、厳島神社の鳥居や原生林に覆われた弥山の山並みが眺望できます。地元グルメでははずせないのは、天然・地あなごを使ったこだわりの「あなごめし」です。また、全国一の生産量を誇る熊野筆はメイク用ブラシでも有名な、品質の高さを誇る広島県の名産品です。

ADDRESS ● 〒739-0411 広島県廿日市市宮島口1-15-60

ACCESS ● 広島電鉄競艇場前駅(レース開催日、場外発売日のみ停車)から徒歩すぐ、JR宮島口駅、広島電鉄広電宮島口駅から徒歩5分。山陽自動車道廿日市I.C. から5分、大野I.C. から10分。



競艇振興会

KYOTEI PROMOTION ASSOCIATION

〒108-0073 東京都港区三田3-12-12 笹川記念会館 TEL.03-5232-2511 FAX.03-5232-2519

競艇振興会HP ⇒ <http://www.kyotei-pr.jp/>

競艇オフィシャルWEB ⇒ <http://www.kyotei.or.jp/>